



岩 野 タ メ さ ん 屈足31号在住

95 歳 (明治21年12月生)

昭和57年2月14日訪問 若原幸雄

私は、徳島県の生れで、明治25年、5歳の時両親に連れられて十勝止若に(現幕別)へ移住し、23歳まで当地におりました。縁ありまして明治43年、御影の岩野浅次郎と結婚し翌年明治44年夫と共に岩松へ移住をし、定住することになりました。

入植当時の岩松には、川に橋もなく立木を切り倒し橋として利用していた。もともと岩松地区は、音更駒場の種畜牧場の予備地として確保されていたが、不用になったため。渡辺善太郎と松浦金平が一括払い下げを受けた場所であったのです。そんなわけで屈足より4～5年後に入植が始まった土地なので、その分だけ開拓の遅れた土地です。やはり、ここにも、先住民のアイヌの人達がおりましたが、和人の入地によって、芽室の毛根に集結されたと聞きました。

生活の状態ですが、まず住居は、屋根も壁も全部、かやと笹などの草葺きです。出入口は戸の代用としてむしろを吊り下げます。風が出ると揺れましてね。床は下に木の小枝を置き上に燕麦稈を乗せて、その上にむしろを敷いたのです。土間のいろりには火を絶えず燃やしていた。これは温度を取ることと虫よけにもなるからです。ストーブ使用するようになったのは相当後のことです。夜の明かりは、通常は、いろりの火の明かりが常で、石油は、「ホトボシ」を夕食のときにのみともし食後はすぐ床に就くのが日常でした。疲れているので良く眠れたものです。もちろん履物など充分手に入らないので、わらで作った、つまごや足袋でした。これは冬に女達が丈夫な綿布で一針一針縫って作るのです。重要な仕事でした。食糧などは自給が当然ですから、白米は殆んど手に入らないので正月位であとは、いなきび、麦、南瓜、薯などで日用雑貨は新得の街まで出て買い求めたのです。もちろん歩いて行くのです。日帰りとなるとかなりの強行軍ですね。一泊する人もいましたね。そんなことから、まだ、新得にしか医者はおりませんでした。私の一家は健康に恵まれ少しぐらいの風邪なら白米の粥を食べ休んでいけば治ったものです。ありがたかったね。子供は次々と生れたが姑にまかせて、ただ一生けんめいに働きました。ようやく通したと思います。これが私の生活の一部の姿です。

農業をするための土地の払い下げ価格は、5町歩、5円位が相場のようなのですが、岩松の場合少し安いようでした。生活にはどうしても現金が必要ですから、造材作業とか林道造りなどの山稼ぎの兼業農家がほとんどでしたね。畑作りは、木を切り倒し焼いて、その焼け跡に棒で穴をあけ種を蒔く、全て原始農法です。それでも土地が新しいから、地味は良く、無肥料で良い作物が穫れました。馬耕はかなり後になってからです。

川久保さん、新居さんは自作農でしたが小作していた人々は小作料として反当り大豆一俵の年貢と聞いております。

林業……造材の最初は流送による運材のため、松、桧、等軽木が中心で、楠、樺の重木は出なかった。場所はまず、ニコロの沢、次にペンケの沢、ペンナイ、キナウシへと伐採されていった。

十勝川本流は、昭和5～6年頃吉本が手を入れていった。中土場とは(アバ)流送した丸太を川